

## ダブリンの一日\*

永 原 和 夫

1995年9月9日(土)、快晴。ジェイムズ・ジョイスが91年前にサンディコーヴのマーテロー塔へ移り住んだ日である。『ユリシーズ』はこの塔の砲台から始まる。きょうはスティーヴン・デイダラスが1904年6月16日の午前中に歩いた道を辿ってみよう。サンディマウントには脳溢血で死んだパディー・ディグナムの家があるはずだ。葬式馬車が通った道沿いにアイリッシュタウンまで行こう。中心街はもう馴染みになったし、パディーが埋められるグラスネヴィン墓地は以前訪ねたことがある。きょうはリフィー河から北へは行かないことにしよう。

8時半、トリニティー・カレッジの食堂でいつものようにパンとコーヒーにソーセージと卵を添えて朝食をすませ、南西門からナソー通りに出た。バス停で二人連れの中年の女性に、サンディコーヴ行きのバスは何番かとたずねると、「フォーティ・フットへ泳ぎに行くところだから連れて行ってやる」とのことである。フォーティ・フットは、バック・マリガンが『ユリシーズ』の第1章の終わりで、暗緑色の海水をかき分けて泳いだマーテロー塔下の海水浴場である。あそこは“gentlemen only”ではないのかと言うと、彼女たちは陽気に笑って、「だから行くのさ」という言葉がかえってきた。それから、彼女たちとべちゃくちゃ話をしながら、市の中心から南東へ12キロほどバスに揺られて、ダブリン湾に面したジョイス記念塔へ向かった。

彼女たちは、マーテロー塔はナポレオン時代にフランス軍の侵入にそなえてイングランド政府がアイルランドの海岸に建てた円形の要塞群のひとつで、サンディコーヴのそれはいまジェイムズ・ジョイス記念館になっており、“Forty Foot Gentlemen Only”はただの名前だということを知っていた。しかし、かつての衛兵専用の海水浴場では、脱衣所の裏のあまり広くないコンクリートの突堤を初老の男が朝日を浴びてふりちんで駆けていたのであるから、彼女たちの言葉はまんざら冗談でないのかもしれない。

ジェイムズ・ジョイス記念館は1982年のジョイス生誕百年祭に見たときとあまり変わっていない。7メートルほどの丸い塔の内部には簡単な家具が置かれ、小説の舞台が再現されている。ただ、モリーとボイルランが寝室でつまんだプラムツリー社の肉詰め(Plumtree's Potted Meat)の容器が、ガラスの陳列ケースに入れられて大切に保存されているのには参った。プラムツリー社の宣伝文句にあるように、これがなければ“incomplete”だと記念館に寄贈されたものであるが、to pot one's meatとはギフォードの解説によると性交を表す下品な俗語である。ともかく、この肉詰めの容器は深さ4.5cmほどの白い陶器であった。缶詰がヨーロッパで一般的になったのはいつころなのだろうか？

曲がりくねった狭い階段を登って砲台に出た。一瞬、だらしなくガウンをまとったバック・マリガンがミサの真似をしている幻想がよぎる。霞がかったダブリン湾はいまなお、スティーヴン・デイダラスが「洗面器に吐きだした母親の胆汁」のようだと言った暗緑色の海水をたたえていた。

塔から『ユリシーズ』の第2章でスティーヴンが歴史と文学を教えたドールキー街のディージー校長の学校までは、徒歩で30分ほどの道程である。それにしても、この辺りからブライまでの海を見おろす高台にはうらやましいほどの美邸が並んでいる。バック・マリガンことオリヴァー・

ゴガティが陸軍省に年8ポンドを払って借り受けたマーテロー塔は、ハシゴを使って出入りする廃塔であったが、大学出の学士さんたちの上流意識をくすぐるのに十分なだけ高級住宅地のなかにあったのである。そんなことを考えながら、左手にブルロック城(13世紀の城はいまでは老人ホームの入り口にわずかにその面影をとどめるのみ)を見、アルヴァートン通りを通してダールキー町まで来た。ダブリンの市街地図はその辺りで切れており、あとはニコルソンの略図が唯一の頼りである。見当をつけて左に曲がりキャスル通りを10分も歩いて間違いに気づいた。かつてデニス・フローレンス・マッカーシーという詩人が住んでいたサマフィールド邸はどこにあるのかと通行人にたずねて、ドールキー街へ抜ける道を教えてもらい、同じ道をとってかえしバーンヒルまで来て、T字路を左に曲がり、オールド・クオーリ(石切り場でもあったのだろう)との角に大きなあばら屋を見つけるまでには小1時間も歩いてしまった。

スティーヴンが教えたクリフトン校は、もちろん、なかった。スティーヴンに「神は街の叫び声だ」と言わせた運動場があった辺りを見たかったが、昔の校舎の一部が私邸として使われており、なかに入ることは許されなかった。しかし、かすかに“Greenbanks”と読めるオールド・クオーリに面した門から、柱にうづくまる二頭の獅子像と大きな棕櫚の木が見えた。あの木の葉の格子縞をとおして、ディージー先生の肩の上に「太陽が金色の斑ら模様を、踊りはねる銀貨を」投げかけたのである。

小高いオールド・クオーリの芝生に腰掛け、遠くの海を見ながら持ち合わせの昼食を取ってから、スティーヴンと同じようにカニンガム通りを歩いてダールキー駅に出て、郊外電車でランズダウンロードへ戻った。ダン・リアを過ぎたあたりで赤ら顔の紳士が乗り込んで、私を見つけて前の席に座り、「アイルランド研究会のパネル・プログラムでProf. Uenoに出会ったが、彼を知っているか」とたずねるので、成城大学の上野格教授ならよく知っている、二週間前にグレンダローへ行った帰りにエイヴォンデールのパネルの生家へ寄ってきた、ジョイスのパネル観は必ずしも英雄崇拜だけでかたづけられないなどと話しているうちに、列車はランズダウンロード駅に止まり、挨拶もそこそこに降車用ドア・ボタンを押して車外に飛び出してしまい、その人の名前はわからずじまいである。

駅からランズダウン・ラグビー場沿いの道を通ってドダー川を渡り、ニューブリッジ街に出るとすぐ左手にパディ・ディグナムの家(9番)があった。飲んだくれのパディの家にしてはいまでも小ぎれいなタウンハウスである。『ユリシーズ』の第6章ハーデス挿話はこの家の前から始まる。近くのサンディマウント通りにはナウシカ挿話で有名になった「海の星」ローマカトリック教会がある。会堂の内陣は美しいステンドグラスで飾られ、祭壇中央の金色に輝く大きい聖櫃が人目を引く。あのなかから禁酒のための修養会に聖堂参事オハンロン師が聖体を取り出したのである。外ではブルームがガーティ・マクダウエル(マクダウエル)の聖なる股間を舐んでいた。

このサンディマウント教会沿いのリーイズ・テラスほど『ユリシーズ』で多くの人が行き来した道はないだろう。スティーヴンもレオポルド・ブルームも、ガーティ・マクダウエルもシシィ・カフリーもエディ・ボードマンも、そしてエディの二人の弟もこの道を通った。

ニコルソンの『ユリシーズ案内』によると、1904年当時の海岸線は教会のすぐ裏まで迫っていた。ブルームが「海の星」教会からもれる賛美歌を聞きながらガーティの挑発にのって自慰を行ったのも、スティーヴンが学校帰りに「サンディマウントの浜辺づたいに、永遠のなかにはいろいろ」としたのもこの辺り海岸である。スティーヴンは、当時教会の裏から大きく半円を描いてリンゼンド公園の方向に食い込んでいた海岸線に沿って、時計まわりに現在ピジョン・ハウス通りがあ

る辺りまで来て、硬い岩角に寝そべったのであるから、そこから肩ごしに振り返れば、リフィー河に入ってくる「3本マストの帆船の高い帆柱が宙に動いている」のが見えたのである。第3章プロテウス挿話の現実、ほとんど形をとどめないほど海水で腐食されているが、ニコルソンの地図を頼りに読むと、教会の裏から北東に向かって歩き出したスティーヴンが、ストラスブルグ・テラスを通り過ぎて、そこに住んでいるサラ叔母さんを思い出し、さらさらと崩れる砂浜に足を取られて東に曲がり、リンゼンドの漁師の家の物干しに十字架のようにぶら下がるシャツに目をとめ、さらに南に下がってはるかにサンディコーヴを望んで「もうあそこへは帰れない」と言ったのがよくわかる。この章の文体がいかに主観的な意識の奔流に見えようと、スティーヴンの意識はやはりしっかりと現実の風景に触発されて動いていたのである。

いまではこの辺りの海岸は完全に埋め立てられ、昔を偲ぶ面影は全くない。スティーヴンが過去と未来を思いながら歩いた海岸には木が植えられ公園になっており、ガーティが腰掛けた石の上にビーチ通りが走っている。サンディマウントの海岸はすっかり形を変えて小さくなってしまったとはいえ、ヨーロッパ有数の美しい海岸であるのに変わりはない。1キロも続くかと思われる金緑色の干潟ではテレビ・コマーシャルのクルーが黒衣の美女を丹念に撮っていた——彼女のそばには真新しい便器が置かれているではないか！

そんなわけで、私はパディ・ディグナムの遺体を乗せた葬儀車がニューブリッジ街の家を出発して、アイリッシュタウンを通りダブリン市の中心へ向かう道を歩いた。三人の市民といっしょに葬送の馬車に乗り込んだレオポルド・ブルームが、喪服を着てつば広の帽子をかぶった青年を見かけるのは、ウォータリー小路を通り過ぎたところである。海岸の散歩を終えて、中心街へ出かけるスティーヴン・ディダラスである。この神話上の父と子とはそれ以来何度かすれちがい、ついに夜の街でいっしょになり、馭者溜まりでココアを飲み、貞節なベネロペイアならぬ不実なモリーが眠るブルームの家に行くのである。彼らが最初に出会った場所の丸谷オ一氏たちの日本語訳（河出書房）には小さな過ちがあるので写真を何枚か撮っておいたが、ウォータリー小路はダーモット・オハレー街に変わり、昔の建物はほとんど残っていなかった。

きょうの調査はこれで終わりにしよう。もう3時近くになる。私はドダー橋の手前で疲れた体を壁にもたれてダブリン市内へ行くバスを待っていた。しかし気がついたときには、バス停から真っ直ぐリフィー河へ向かうソーンキャスル通りを歩いていた。この道は、『ダブリン市民』で、黴臭いパンをかじりながらドダー橋を渡ってやって来た「めぐりあい」の少年たちが左に曲がって入って行った貧しい漁師の住む通りである。左側にはいまでも小さな店が並んでいる。猫を追いかけて少年たちが入って行ったドダー川を見おろす右側の空き地は、現在高層アパートで占められ猫の子一匹はいだす隙もない。リフィー河との突き当たりに僅かに残る空き地に腰をおろし、グランド・カナルとドダー川に分かれる水路を見ながら、「めぐりあい」で学校をずる休みして、リフィー河南岸壁の突端にあるピジョン・ハウス（発電所）までの冒険を試みた少年に愛と懲戒の話を執拗に繰り返す変な男のことを考えていると、二人の少年が怪訝そうな顔をして通り過ぎて行った。はっと我に返り、外套を羽織りカメラをぶらさげて、リフィー河に架かる一番海よりの橋（リフィーの川幅はここまできても百メートルそこそこである）を渡り、ノース・ウォール岸壁に出た。そこから税関の美しい建物まで1キロくらいは昼間でもほとんど人が通らず、倉庫沿いの暗い道は身の危険を感じるほど不気味だった。

トリニティの学寮に戻ったのは5時を過ぎていた。シャワーを浴びて、ひと休みし、7時にはいつものようにセミナーの仲間と大学正門で落ち合って夕食に出かけた。その晩は私の提案でウ

エストモアランド通りのハリソンの店へ行った。このレストランの前で、ブルームは頭がおかしくなった夫の心配をしているかつての恋人、ブリン夫人と出会ったのである。ハリソンの店にはジョイスの写真が飾ってあり、生ガキの前菜と 12 オンスのビフテキは期待を裏切らなかった。それにしても、きょうは一日よく歩いたものである。

\*筆者は 1995 年 8 月 23 日から 9 月 13 日までダブリンのトリニティ・カレッジに滞在し、アイルランド初期教会文化史のセミナーに参加した。